

謡曲「小林」考

小林 健 二

要 旨 謡曲「小林」が、世阿弥の完成した軍体の能に比して鬼能的な色彩が強く、軍体の能に先行した修羅の「面影をとどめているであろうことを指摘し、並びに、本説としての『明德記』との関係を、能作の側の意識から掘り下げて考察した。

目次

- 一、はじめに
- 二、修羅としての「小林」
- 三、「小林」と『明德記』
- 四、謡曲作者の構成意識
- 五、「掛ヶ合」における作者の意図
- 六、むすび

一、はじめに

明德二年（一三九二）十二月晦日、京の内野において大規模な反乱が起こった。かねてから室町政権の安定を目指し、有力守護の勢力削減を計っていた三代将軍義満に対して、山陰の雄、山名氏清・満幸が叛旗を翻したのである。戦いは「人馬弥カ上ニ死重テ、血ハ涿鹿ノ川ト成テ紅波楯ヲ流セハ、尸ハ屠処ノ肉ヲ積テ、白刃骨ヲ碎ク^{（1）}」という、文字通りの血を血で洗う白兵戦となり、その日のうちに山名方の敗北に終わった。氏清は壮烈な討死を遂げ、満幸は西国へと逃亡する。世に言う「明德の乱」である。この合戦がその熾烈さと、内野という身近な場所で起こったことから、長く京の人々の脳裏に焼き付いたであろうことは、想像に難くない。それは『明德記』下巻に、「去程ニ、去年

十二月晦日ノ合戦ニ人馬多死重テ、内野大宮辺ノ戦場ニハ夜々ニハ修羅闘諍ノ声聞ヘテ、時々ニ合戦死亡ノ苦ヲ抱ク音ノミ人ノ夢ニモ幻ニモ見エ聞ケル」と記されていることから窺えよう。

謡曲「小林」は、この明徳の乱を素材とした能である。但し、現在では演じられることのない、いわゆる番外謡曲の一つである。成立時期は明らかではないが、曲中のワキの文句に「氏清の御事は。昨日けふの事にて候」とあるよう、明徳の乱に対する巷間の記憶が生々しいうちに作られたと考えられよう。『申楽談儀』に見られる、応永年間に起こった小山氏の乱を素材とする「安犬」などと同様、際物的な内容の作品と言えよう。演能記録としては、『春日若宮拝殿方諸日記』の宝徳四年（一四五二）の条に、

一、二月十日ヨリタキムサルカクアリ、……………

一、十二日、カンカウ大夫、一コン送事……………

一、ノウノ次第、シテ、ワキニハウシヤウカ□、次サタタウ、次タカヤスノ女、次スルスミイケスキ、次ナカラノハシ、次、ワウシウウチキヨ。⁽²⁾

とあり、傍線の「奥州氏清」が「小林」の異称である可能性は強く、今のところ唯一の記録である。また、室町後期の謡本が数本存することや、永正頃の金春座系の装束付『舞芸六輪次第』や彰考館蔵の大永元年奥書の囃子伝書『囃子方習書』に、「小林」に関する記事があることなどから、室町後期までは細々ながらも演じられていたと推測される。作者については、『自家伝抄作者付』では世阿弥、『能本作者註文』では宮増の作とするが、確定的な根拠はなく、今のところ不明とするよりほかない。作風からは、世阿弥やそのグループによる作品とは考え難く、北川忠彦氏が説かれるよう、宮増作とされる能の特色と一致することが多い。⁽³⁾ また、宝徳四年に春日社頭で「小林」を演じた金剛も、軍記物を素材とした作能が得意だったよう⁽⁴⁾で、金剛系の能である可能性も考えられるが、ここでは、世阿弥の

系列ではない。傍流の能であらうことだけを推測するにとどめたい。

本曲を通読して感じることは、まず、長大な「語り」を有することである。また、「語り」も含めて、「替女のハヤフシの謡」や「梓巫女の口寄せ」などの諸芸能を取り込んでいる点、他にあまり類を見ない珍しい曲と言えよう。⁽⁵⁾そして、本説の面からは『明德記』との関係が注目される。

従来の研究史としては、やはり『明德記』との関係が、坂井衡平・後藤丹治・富倉徳次郎等、主に軍記研究の諸氏から指摘されている。また、角川源義氏は、『明德記』の成立に時宗の徒が関与していたであらうことを指摘されるところに、謡曲「小林」が語り物成立の事情を示唆する好個の例であると説かれている。一方、能楽研究の側からは、番外曲ということもあってか、正面から取り上げられることが少なく、後に紹介する天野文雄氏の御論の他、これと言ったものを見ないようである。

本稿では先学の驥尾に付し、「小林」が、世阿弥が軍体の能を形式する以前の修羅の面影をとどめているのではないかという点を指摘し、次に、本説としての『明德説』との関係を、能を作る側の意識から掘り下げて考察したい。

二、修羅としての「小林」

「小林」の謡本（写本）は、『国書総目録』によると約二十本程現存する。諸本を校合すると、「問答」を主体とした番外曲にはありがちなことであるが、かなり異同が激しい曲であり、大きく四つの系統に分けることができる。⁽¹⁰⁾その中で、松井家蔵一番綴謡本（大永から永正頃の淵田虎頼等節付）の系統が、他の謡本が合理的な改変を施しているのに対して、最も古態を残しているようである。次に松井家一番綴本によって、構成と梗概を示そう。

- 1、ワキの登場——山名氏清ゆかりの丹波方の僧（ワキ）が、世上の沙汰を伺わんと石清水八幡に詣でる。
- 2、ワキとアイの応対——僧が男山の所の者（アイ）に何か珍しいことはないかと尋ねると、所の者は、山上の廻廊で瞽女が氏清のこと謡っていると案内する。
- 3、アイの誘いの文句と瞽女の謡——僧は瞽女の謡を所望し、所の者がそれを伝えると、瞽女（ツレ）は氏清の乱の顛末をハヤフシで謡う。
- 4、シテの登場とワキとの問答——瞽女が謡っている所へ見慣れない宮ツ子（シテ）が現れ、氏清の乱は「昨日や今日」の事」だからと、謡うことを禁制する。僧は、氏清ほどの名將を謡に作って謡うのは慣習であるし、また、軍の場にあつたものはその様子を語るものであるからと、許すように説く。
- 5、シテとワキの応対——宮ツ子は、実は氏清が神前で軍評定したのを御灯の役で詳しく聞いていたので、それを語ろうかともちかけ、僧も是非にと所望する。
- 6、シテの軍語り——宮ツ子は、八幡神前で軍評定が行われた際、氏清の家臣、小林上野守が浄憲法印のことを引いて、氏清に諫言したことを語る。
- 7、シテとワキの掛け合——内野合戦での山名勢の手分けを僧が聞き、宮ツ子がそれに答える。
- 8、梓巫子の口寄せ——梓巫子（ツレ）が登場し、梓に掛けて小林の霊を招き寄せる。
- 9、後シテの登場・立働き——梓に引かれて甲冑姿の小林の幽霊（後シテ）が現われ、内野の合戦で奮戦した様子を学んで見せる。

以上、全9段から成っている。構成の頂点は、6段のシテの軍語りと、9段の後シテの立働きということになる。右の構成を世阿弥が完成させた「敦盛」「忠度」「清経」「頼政」「実盛」等の軍体の能と比べると、「クリ」「サシ」

「クセ」を持たないこと、「語り」を中心として成り立っていること等、同じく軍記を素材とした能ながら大きな相異が見られる。特に、後シテが「名ノリグリ」で登場した後、あまり働かず終曲を迎えてしまうことは、軍体の能というよりは、切能系の鬼能に近い印象を受ける。さらに言えば、複式夢幻能では、前シテ（後シテの化身）が自分の正体をほめかしてへ中入するのが普通であるが、本曲では、シテの宮ツ子は、自分が小林上野守の幽霊であることを明らかにしないし、軍語りも三人称で客観的に語られている。すなわち、詞章上からは、前後のシテの人格が同一でないことが窺えるのである。

それと共に考え合わせられるのが、シテの中入部分が謡本を見わたしたかぎりにはつきりしないことである。また、通常、中入後は「アイの語り」が入るのであるが、現存する「問の本」には2段・3段のワキとの問答は載せるが、中入後のワキとアイの問答を載せているものはない。⁽¹¹⁾ これらのことを総合すると、「小林」は前シテにあたる人物が中入せず、別人の扮する神霊が登場する護法型の構造を持っていることが導かれよう。

一方、「小林」は装束付の上からも通常の軍体の能とは異った点を見い出せる。現存する唯一の装束付『舞芸六輪次第』の記事は次のようである。

一、小林。してハ、まへハ風折糸ほし、大くちにかりきぬ。後ハ半切・はつひ・小袖・そてなし。かふとを着る。

長刀を持。わきハ僧一人。つれ女、これ、めくらこせ。小袖・水衣など吉。⁽¹²⁾

右の中に、「かふとを着る」とあるが、この「かふと」は、武将の幽霊が帯するのであるから、鳥兜などではなく、文字通りの甲のことであろう。この記述では、後シテは甲だけかぶって登場したことになるが、それだけでは奇異であり、やはり甲冑を帯していたと考えられよう。多武峰様猿楽など、甲冑を身にまとった能はあったようだが、通常軍体の能に比してかなり異様である。そして、注意されるのは、これが上巻「しゆら能」の部ではなく、下巻の「鬼

之能」の中に分類されていることである。このことは、少なくとも、「小林」が室町当時は鬼能として認識されていたことを物語っている。

ところで、高知県室戸市吉良川町吉良川八幡宮の御田祭において、近年まで田楽の「小林」が行われていた。寛政五（一七九三）年奥書の謡本が残されており、それに基づいて謡曲の9段以降が演じられていたのであるが、その謡本の注記に、「小林 老人 但装束赤熊 小林面 具足大小長刀用ル⁽¹³⁾」と装束付けが記されている。これによると、小林の扮装は、甲冑を帶し長刀を持つことなど、『舞芸六輪次第』の記事とかなり近い。注目すべきは「小林面」というのが、鬼の面であることである。つまり、鬼面の甲冑を帶した武者の霊ということになる。吉良川八幡の御田祭で、「小林」が、何時頃から何故に行われるようになったかは定かではないが、恐らく中央で演じられていたものを学んだと考えられよう。とすると、廃曲になる以前の室町時代の「小林」の面影をかなり映していると考えられ、辺境の地に、しかも神事として伝わったからこそ、他の芸能の影響を受けずにその姿を良く残しているとも考えられる。とすると、『舞芸六輪次第』の分類と相まって、「小林」が鬼能であった可能性の一つの裏付けとなる。

さて、先に述べた構造上の特色と、ここに述べた鬼能的な色彩を加味すると、「小林」は護法型でしかも鬼能であったことが浮上してこよう。すなわち、長い前場の「問答」「語り」の後、前シテの宮ツ子はそのまま残り、それとは別の人物が梓巫女の口寄に引かれて鬼の面・甲冑姿の小林の幽霊に扮して登場し、立働きの後退場するという、「護法」や「昭君」「松の山鏡」のような型の能である。

ここで思い起こされるのが、世阿弥が軍体の能を完成させる以前に、修羅という能があったことである。『風姿花伝』第二物学条々には、修羅について次のように記されている。

これ又、一体の物なり。よくすれども、面白き所稀なり。さのみにすまじき也。但、源平などの名のある人の事

を、花鳥風月に作り寄せて、能よければ、何よりもまた面白し。是、ことに花やかなる所ありたし。これ体な修羅の狂ひ、やゝもすれば、鬼の振舞になる也。又は舞の手にもなる也。それも、曲舞がかりあらば、少し舞がかりの手づかひ、よろしかるべし。弓・箭やぐひを携へて、打物を以て敵かきとす。その持ち様・使ひ様をよくくうかがひて、その本意をはたらくべし。相構々、鬼のはたらき、又舞の手になる所を用心すべし。⁽¹⁴⁾

右から窺える修羅の能は「よくすれども、面白き所稀なり。さのみにすまじき也。……これ体な修羅の狂ひ、やゝもすれば鬼の振舞になる也。……相構々、鬼のはたらき……になる所を用心すべし」とあるよう、鬼の能に近いものであったらしい。

この修羅の能の実体像を明らかにしようとしたのが、伊藤正義氏の「世阿弥における能の形成——修羅と軍駄を中心として——」⁽¹⁵⁾である。伊藤氏は、高野辰之氏の御説を参照しながら今川了後の『落書露頭』の次の記事、

さても、師直うたれて二三年後にてありしやらむ、祇園の勧進の田楽侍りしには、四足の鬼と云ふ能をせしに……⁽¹⁶⁾

から、文和年間（一三五—一五五）、祇園社の勧進田楽において、その二、三年前に討たれた高師直をめぐる「四匹の鬼と云ふ能」が演じられていたことに注目され、これが世阿弥の言う修羅であろうことを推測されたのである。この御説は、それまで鬼能とされていた「四匹の鬼」を、修羅の能として扱えた画期的なものであったが、その後あまり顧られることはなかった。例えば金井清光氏が、⁽¹⁷⁾「四匹の鬼」は藤原千方が金鬼・風鬼・水鬼、隠形鬼という四鬼を駆使して朝廷に背いたことを描く「千方」のことであるとされたなど、修羅としてではなく、鬼能として扱えられて来たようである。

が、最近、天野文雄氏は「能と仏教——修羅をめぐる」⁽¹⁸⁾において、伊藤説を再評価され、それを踏まえた上で、

あらたに修羅の能について論究されている。天野氏の新視点は次の三点になろう。

一、『落書露頭』の善本（彰考館本）の出現により、「四匹の鬼と云ふ能」が、「四頭八足の鬼と云ふ能」に訂正されるべきであることの確認。

二、『太平記』卷二十三に登場する修羅道に墮ちた楠正成の亡霊や、『観仏三昧経』における修羅の像から、当時の修羅が多頭多足のイメージで把えられており、「四頭八足の鬼」のイメージと重なることの指摘。

三、「小林」が、軍体の能の先蹤たる修羅の能の現存例として、たいへん貴重であることの指摘。

以上であるが、第一点については、同じく了俊が『了俊一子伝（辨要抄）』（応永一六年奥書）において、『落書露頭』と同じ話題を採り上げ、「田楽のうに、四頭八足と云さるがうせしに」と記していることも補強となろう。天野説は、伊藤説を補う以上に、修羅の能の具体像を浮上させた点でたいへん刺激的である。特に、「小林」と修羅の能の関係は、「小林」と「四頭八足の鬼」がどちらも際物的性格であり、また、先に述べた「小林」の鬼能的な性格を鑑みた場合、首肯すべき御説と思われる。ただ二の点において、「四頭八足の鬼」のイメージが千頭王鬼となつて七頭の牛に乗っている正成の亡霊や、九頭で頭毎に千眼あり、九百九十九手八脚で、口中から火を吐くという『観仏三昧経』の修羅の像と、直ちに結びつかないうらみが残ろう。そこで、もう少し修羅の具体像について明らかにしたい。

修羅は阿修羅とも言い、鬼神の一種で、須弥山下海底に住み、切利天に住む帝釈天と絶えず闘争を繰り返しているとされる。仏教では天の部類には入らず、八部衆の一尊として知られている。具体的な姿を求めて、図像化された阿修羅像を追ってみると、不定形な多頭多足の像ではなく、有名な興福寺のものに代表されるよう、ほぼ三面六臂二足に落ち着くようである。興福寺の像は、八部衆の一尊として善神の容貌を持っているが、中世に入ると阿修羅は恐しい鬼形に描かれるようになる。例えば、『北野天神縁起』（承久本九卷、承久元年（一二一九）成立、北野神社蔵）の

第八卷「修羅道」には、天上の帝釈天と合戦する阿修羅が描かれているが、その姿は二つの宝珠を頂き、弓箭と二本の剣を持った三面六臂二足の恐しい鬼形である。ほぼ同様の姿が、聖衆来迎寺蔵『六道絵』（鎌倉中期成立、全一五幅）の「阿修羅道図」にも見られる。また、中世から近世にかけて流布した「十界曼荼羅」に描かれる修羅も、三面六臂の鬼神の姿である。このように、阿修羅は三面六臂二足の鬼神、というのがほぼ定形なのであるが、これは見方を変えると、三頭八足の鬼ということになる。さらに、阿修羅の中では見つからなかったが、他の鬼神像の中には、三頭の上にさらに小さな一頭を乗せているものもまた見うけられ、そうなると正に四頭八足ということになる。一般的に憤怒の形相をした鬼神像には、三面六臂二足のものが多く、阿修羅にだけ見られる特長ではない。しかし、「四頭八足の鬼」、すなわち中世における修羅の具体的なイメージを、図像を一つの手掛りとして明らかにできるのではなからうか。

三、「小林」と『明德記』

明德の乱の顛末を記した『明德記』は、室町軍記の初頭を飾るものとして著名である。その成立は、富倉徳次郎氏⁽¹⁹⁾によると、乱後、明德二年夏から同四年冬までの間に初稿本が成立し、更に、作者自身による訂正加筆を経た増訂本が、応永三年夏から秋にかけて成立したとされる。早くから語り物的色彩の濃いことが指摘され、『看聞御記』応永二十三年（一四一六）七月三日の条「先日物語僧又被召語之。山名奥州叛事一部語之。有其興：」に見られる如く、物語僧の語りの素材ともされたようである。

この明德記が、乱後かなり世間に流布しており、謡曲作者の眼にもとまっていたであろうことは、曲中のワキの詞

章の中に「氏清の御吏、弓とつての名匠にて御座候間、世にるふさせんが為に、めいどき（『明德記』の音便変化）にもあらはされて候に」とあることから窺えよう。また、このワキの詞章が、従来「小林」と『明德記』との直接的關係を示している、と考えられていたようである。

ところで近年、天野文雄氏は、⁽²⁰⁾「小林」は『明德記』を直接の典拠としたのではなく、実際に石清水八幡宮社頭において宮ツ子に語られていた物語が曲中に取り入れられたのであり、件のワキの詞章も、この能が『明德記』とは別個に成立したことを明言したものではないか、との見解を示された。それまで、「小林」と『明德記』の關係は、素材面の一致から漠然と認められていただけで、両者を詳細に比較した研究がなかったことから、この御説は新しい問題を提起することとなった。但し、両者間で一致する部分も多く、しかも、石清水社頭に於いて宮ツ子が軍語をするという、実例の見つからない語りの芸態を想定するなど、再考を要する点もあるかと思われる。そこで、本稿では天野説を踏まえた上で、あらためて両者を比較し、影響關係を検討したい。

「小林」において『明德記』の記事と対応するのは、6段・7段にかけてである。長くなるが、次にその全文を松井家一番綴本により挙げよう。なお、句読点・濁点は原本のままとする。

〔6〕「語り」 物カタリ さて明徳二年十二月廿六日に。山名のむつのかみ氏清は。いつみの堺をたつて此やわたの

おやまにちやく陣す。^A年頃めしつかひけるはかせをめして。いくさの定日をゑらひ申せと仰有しかば。はかせう

らかたをひいてはいく。そうして氏清は水性の人にてまします。冬の水はわうをつかさとるなれば。あつはれ此

御合戦年内にも御座候へかしと申せば。はしめは正月二日にさためられしを。俄に引かへ十二月みそかにさたむ。

先にしのおかにひかへたる。小林の陣へ使者をたて。急度参れ仰合らるへき事ありと有しに。小林申様。御合戦

の定日を承。是よりすくにうち野へはせ参べきよし申。氏清大きにいきなり。めずに参らずは氏清が参べきやらんと仰られしかば。じするに及ず小林八幡の御陣に参り。氏清今迄違参意得すとて。御けしきあしかりしに。小林ちつともさはかす申やう。日頃御心よせのかた／＼に仰合られ候上は。今更何の御大事の候と申せば。氏清此事はしめより御ぶんにこそたんせしかども。氏清がとがのみいひて。無念の心中はとぶらはざりつる間。なかばはおことにだんぜぬなり。其時小林。先御心をしつめてきこしめされ候へ。御せんそにきては。わづかに上野の守にて御座候ひしが。たうけ御身にあてゝ四ヶ国。御一門にをひて十二ヶ国御拝領候上は。何の御不足か候べきと申せば。氏清いや所領につきての望はなし。ひとへに此一門はろぼさるべき御たくみなれはと仰られしかば。

小林いやそれもさるためしの候。平家運末に成時かとよ。ほうしやうし殿より西八条へ打てむかふと聞えしかば。じやうかい大きにいきなり。打手のむかはぬさきにゐむを取奉りて。ゑんごくへうつし申さんとて。すでにうつつたつよし聞えしかば。ほうわうおとろき覺しめし。じやうげむほうゐんをもつて御なため有しかども。じやうかいせういん申さざりしかば。法印涙をながし。ゑみゝをしんしてめをうたかはんは。けんじんかへつてさんしんたるへし。世は末世におよふといへとも。日月は地におちたまはず。詞あつはれは人のけうがいにてもや候らんと申せば。さしもよこがみをやぶりしじやうかいも。たけき御まなこよりなみたをなかし。其御むほん覺しめしとゝまりたまひぬとうけたまはる。ゑあつはれそれかしも法印程の身にあらは。なとか申とゝめさらんと

〔下ヶ哥〕 詞ゑさめ／＼となきければ。さしもにたけき心にも。おく見えけるかみちのくの。しのぶ涙はせきあへす

〔語り〕 シテ詞かくてせんひをくひてかなはし。是これ見給へとて。にしきの御はたを取いたし是は一とせなんでうより給りたり。是に子共をあひそへ。もし運ひらきなば世はよしかはからいと仰られしかは。其時小

林。へめいはぎによつてかろしといへり。

〔上ノ詠〕 へとり得すはきえこそはてめあつさゆみ。引はかへさしみちしはの露

〔□〕 ワキ詞／とても事に。てわけのやうが承度候

〔掛ケ合〕 シテ／まつないばぜい五百きを。一番せいとぞさためける ワキ／さておはしの三郎はいかに

シテ／おはしの三郎は。よる／みねのたうに陣取て居たりしが。何とかおもひけん。うしろに一手なくてはかなふましとて。へつちやのいつたう詞三百余き。さも花やかに梅津松の尾。へならひの岡を内野の陣の。西おもてにこそとつたりけれ ワキ／さて小林の上野の守は シテ／小林には丹波せい五百き相添。内野に時の声あからは。へせめいれとこそ下知しけれ

ワキ／さて大しやうの御せいいか程有けるそ シテ／そうして氏清の御せい三千八百余騎。あへてしりそく事なかれと。へことばに花さくそのいきほひ

〔上ケ哥〕 同へたとへはかんのかうその。く。せうわうをせめんとてせうがかむしんを左右にたて三尺の劍をひつさけしも是にはいかてまさるへき シテへされはよそれはいなから天下をとりしあつさ弓 同へ是はひきかへて名をこそこのせみちのくのしのふもちすり誰ゆへそ。世の乱れ成らん じむこうの程そ無念なる

右の展開を大雑把に押えると、6段は男山での氏清の軍評定を宮ツ子の「語り」で描き、7段では山名方の軍勢の手分けをワキの僧とシテの宮ツ子の「掛ケ合」によって列挙する、というように進むのであるが、この展開は『明徳記』上巻の後半部の話の順序（『明徳記』諸本間で大きな異同なし）と鮮やかな対応を見せる。さらに、「語り」の内容をモチーフごとに分析して、『明徳記』の該当部分と比べてみよう。

6 段の「語り」は、次の四つのモチーフから成り立っている。

- 1、氏清が陰陽師に占わせて、決戦の日を正月二日から十二月晦日に変更したこと。
- 2、氏清が取り巻きの者達との談合でこの合戦を計ったことに対して、小林上野守が不満を述べること。
- 3、小林上野守が、浄賢法印が平清盛を諫めた話を引いて、氏清に諫言すること。
- 4、氏清が合戦に備えて南朝より錦の御旗を賜ったことを語り、小林上野守に乱後の執事職を授めること。

このうち、1・2・4の三つは、『明德記』にも見られ、叙述の方法や量の多少の違いがあったり、話の順序が入れ変わっているなどの相違こそあるものの、基本的な内容において一致することが認められよう。一例を示すと、語り出しの氏清が陰陽師に決戦の日を占わせる条であるが、『明德記』では、

「サラハ、合戦ハ正月二日」ト定メタリシ処ニ、峰堂八幡ノ勢共技々ニ落テ、夜々ニ勢スクト聞ヘケレハ、「角テハ、何トカ有ヘキ。サラハ、年内ト明春ト何レカ合戦ニ利アルヘキ」ト被召具タリケル陰陽博士ニ占ハセラレケルニ、博士占形ヲ開テ心静ニ合戦ノ吉凶ヲ勘カヘルニ、「奥州ハ水性ノ人也。時今冬也。サレハ、水ハ王ニシテ、年内御合戦有ハ治定ノ御勝」ト勘ヘ申タリケレハ、奥州誠ニ快ケニテ、「サラハ、方々ノ責口ヘ相触ヨ、合戦ハ晦日」トソ被定ケル。

となっており、これを謡曲の傍線A部分と比べると、内容的な一致はともかく、表現の上でも非常に近似していることがわかる。このように、両者の関係は一目瞭然なのであるが、ただ、四つのモチーフの内、3の小林が氏清に諫言する場面で「浄賢法師が後白河法皇を配流しようとする清盛を諫めた——『平家物語』の「法師問答」」を例話として引く部分（点線枠内）が、『明德記』には見られない。天野氏は、この点を「小林」が『明德記』を直接の典拠としないことの要因とされている。確かにこれは問題になろうが、この話がストーリーの相違ではなく、諫言の場に引用

される例話であることに留意する必要がある。

ところで、『明德記』の諸本の一つである松平文庫本には、この小林の諫言の場に、

昔、異国ニ吳王夫差イッシハ、越ノ国ヲ打取り、勝驗テ齊ヲ討ツト企ル。伍子胥、是ヲイサメシニ用ヒス。剩ヘ伍子胥ヲ先ツ誅シケリ。其後、師ヲ致テ越ノ為ニ打負テ、最後ノ言ニ曰ク、『黄泉担子胥自獄率猶強』トテ、終ニ空フ成ニケリ。⁽²¹⁾

という、伍子胥が吳王夫差に諫言をしたため誅される説話が挿入されている。この松平文庫本（上巻のみ零本）は、近年、和田英道・大森北義の両氏によつて相継いで報告された一伝本である。⁽²²⁾ 両氏の御説によると、記事構成や叙述が他の伝本より簡潔で記録的であり、また独自の本文が散見されること、叙述の順序の違いが見られることなど、比較的異同の少ない『明德記』諸本において注目されるべき伝本であり、大森氏は「原初的な形態の性格」を有すると推測されている。この松平文庫本が、謡曲と同じく小林の諫言の場で、例話を挿入していることは軽視できないと考えられる。すなわち、この部分は例話が入り易い場面であり、松平文庫本以外にもこの部分になんらかの逸話——それが「法印問答」であることも有り得る——を差し入れた伝本があったことも想定できるのではないだろうか。とすると、謡曲作者が「法印問答」を含んだ伝本を見たことも考えられるのであるが、それよりも、中国の話である「伍子胥と吳王夫差」の説話を、『平家物語』にある「法印問答」と差し換えたか、または享受者の嗜好を考えたとこの話を挿入した可能性もあると考えられる。作者の一曲を作り上げる際の構成意図のことを考慮すると、むしろその可能性が強いのではないかと思われるのである。

四、謡曲作者の構成意識

前節において、小林諫言の場における「法印問答」説話の挿入は、多分に作者の意識的な作為による所産であると述べたが、このように「小林」には『明德記』を用いながらも素材に寄り掛り過ぎずに、それを分解して再構成するという、明らかな構成意識が見られる。最も顕著なのは6段の終りに位置する傍線Bの「上ノ詠」へとり得すばきえこそはてめあつさゆみ引はかへさじみちしばの露」という和歌である。この和歌は、小林の諫言からの続きとしていささか唐突な観で謡われ、語りの流れを中断させるような印象を受ける。が、「語り」の最高潮に位置し、「掛ヶ合」に続く上にひとつのアクセントとなっていることなど、作者から重大な役割を与えられていることは確かである。また、「天下を取ることができなければ、消え果ててしまえ梓弓。一度と生きては引き帰さない道芝の露のようはないこの命よ。」という歌の内容からも、いやがおうでも悲愴感を高めているのであるが、実は、この和歌は『明德記』の下巻に出て来る、氏清が合戦を前にして送った御台所への手紙の中に見られるのである。その部分を次に引こう。

サテモ此御台、久手ヲ放ス持給ヒタル文ニ、最後ニ物ヲ書添テ御胸ニ当テ、死給シヲ、怪ト思進セテ傍ノ人御送ノ際ニ取テ見レハ、十二月廿七日ニ八幡ヨリ和泉へ進ラセタル奥州ノ御文ニテソ有ケル。余リノ労サニアタリ也ケル僧、此文ノ裏ヲ翻シテ六喻ノ真文ヲ書写シテ、此人々ノ追膳ニ備フ。其奥州ノ御文ニハ、

取エスハ消ヌト思ヘ梓弓引テ帰ラヌ路芝ノ露

其袖書ニ女性モ歌ヲ書副給ケリ。

沈ムトモ同ク越ン待シハシ苦シキ海ノ夢ノ浮橋

ト有ケルヲ、人コトニ哀ミテ袖ヲ濡サヌハ無カリケリ。

「小林」の「上ノ詠」が、右の氏清から御台に贈られた和歌から取られていることは明らかであろう。しかも、この和歌は増訂本と言われる陽明文庫本では、

かへらずばきえぬとおもへ梓弓 ひくはうき居のみちしばの露

となっており、初句・二句・四句が「上ノ詠」の形と違っている。このことから、「小林」が増訂本統系ではなく、初稿本系の本文を参照したであろうことも判明するのである。

ともあれ、このように、物語中の掛け離れた位置にある和歌を、6段と7段を継ぐ一曲の極所に配するあたり、謡曲作者の意図がかいま見られるのであり、決して既成の語り物をボンと差し入れただけでないことがわかう。

さて、以上のことを踏まえて、先に引用した6段・7段の全体を振り返ってみたとき、次のことに気が付く。「上ノ詠」の和歌は、「梓弓」という語とその縁語である「取る」「引く」を巧みに配してよまれているのであるが、7段の「上ケ哥」傍線Cを見ると、「されはよそれはいなから天下をとりしあつさ弓 是はひきかへて名をこそこのせ」と、「上ノ詠」に出ている「梓弓」とその縁語が、織り込んで作詞されているのである。これは、6段の「上ノ詠」と7段の「上ケ哥」とが対応していることを示しているよう。

さらに、このような語句間の対応関係に注目すると、6段の「下ケ哥」傍線Dの「おく見えけるかみちのくのいふ涙はせきあへすが、やはり7段「上ケ哥」傍線Cの「名をこそこのせみちのくのいふもちすり誰ゆへそ」と同じ歌語を踏まえて呼応すると考えられまいか。とすると、この6段から7段にかけての構成は、『明徳記』から抜き出した叙事的な「語り」「掛け合」の部分と、それを繋げる「下ケ哥」「上ノ詠」「上ケ哥」の節をとった叙情

的な部分から組み立てられており、叙情的部分は、それぞれB「梓弓」、D「みちのく」の歌語とその縁語を用いて、6段・7段の詰めの部分に位置するCの「上ヶ哥」に収束するように、効果を考えた上で意図的に構成されていると考えられよう。ここには、謡曲の作詞法上よく言われる、綴れ錦というような華麗な修辞はない。むしろ稚拙な観さえあるが、『明德記』の中の一和歌を採り上げ、それを軸とした、修辞以上の明らかな作者の構成上の意識が窺われるのである。

ところで、謡曲作者が『明德記』から受けた影響について考えると、次のことも考えられよう。すなわち、「小林」の7段「上ヶ歌」の傍線Eの部分「たとへはかんのこうその。／＼。せうわうをせめんとてせうがかむしんを左右にたて」という比喩表現であるが、これは、『明德記』中巻の次の部分、

御馬廻ノ軍奉行ニハ、一色左京大夫詮範・今川右衛門佐仲秋兩人也。何モ元来名ヲ得タル勇士共ナレハ、御勢ノ進ミ退ク処ニ御旗ヲ堅ク兵ニ守護セサセ、前後左右ニ馳廻リテ兵ヲ勇メ、勢ヲオキテ傍ヲ払ヘル有様ハ、高祖ノ韓信・彭越カ兩将ノ機ヲ司テ、百万ノ兵ヲ指呼ニ随ヘシニ殊ナラス。

という、將軍義満の威容を描く場面で、一色左京大夫と今川右衛門佐を左右に配した様子を、高祖が韓信・彭越の兩将を左右に配したのに例えた表現に、少なからず影響を受けているのではないかと思われるのである。

五、「掛け合」における作者の意図

前節では、「語り」を中心として作者の構成意識について考察したが、本章では7段「掛け合」の内容について考察したい。

謡曲『小林』考（小林）

まず、『明德記』の〈初稿本〉と〈増訂本〉、それから「小林」のそれぞれに記された、山名方の軍勢の手分けの状態を一覧できるように表にしてみた。

×	×	×			
小葦治郎左衛門 同平次右衛門尉 土屋党	山名幡磨守満幸	山名上総介 小林上野介	山名陸奥守氏清	因幡勢	山名中務太輔 入沢河内守
三百余騎	千七百余騎	七百余騎	(群) 二千三百余騎 二千余騎 (松) 三千八百余騎	三百余騎	書陵部本
五百余騎	二千余騎	七百余騎	二千余騎	五百余騎	陽明本
② (③)		③ (②)	④	①	謡曲「小林」
三百余騎		五百騎 (三百騎)	三千八百余騎	五百騎	

(注) 一、人名上の×は謡曲中に名前が出てこない人物。

二、数字上の（群）は群書類従本、（松）は松平文庫本の場合を示す。

三、謡曲の①～④は登場する順番を表わす。

四、（ ）の数字は別系統の謡本の場合を示す。

この表を一見して気が付くことは、（注）の四で挙げたよう、『明德記』で列举される軍勢の順序と、謡曲のそれとが違っていることである。すなわち、謡曲では、①因幡勢、②小葦の三郎、③小林上野守、④大將氏清の順に挙げられており、『明德記』の配列を意識的に再構成したことが窺えるのである。また、謡本によっては、②小林上野守、③小葦の三郎と、順番を入れ換えているものもあるが、これは⁽²³⁾『明德記』の記述順序に戻そうとする、後の改変と考えられよう。

次にわかることは、軍勢の数字に異同が見られることである。このような数字が動き易いことはよく言われるが、『明德記』間でも相異が目立ち、当然「小林」との間も、一致を見る方が少ない状況である。例えば、因幡勢五百騎は増訂本の方に一致するのであるが、大葦・土屋党三百余騎は初稿本系と一致するがごとく、一様に割り切れない複雑な伝承が窺えるのである。その中で注目されるのが、謡曲中で氏清勢が三千八百余騎とするのに対して、松平文庫本が、「氏清ハ廿六日ノ早旦ニ其勢三千八百余騎、和泉堺ヲ打立テ」という、妙に合った数字を持つことである。

これは、先の諫言の場での「吳王夫差と伍子胥の説話」とも考え合わせて、松平文庫本系伝本の謡曲に与えた影響の少なくともことを暗示していると考えられよう。

もう一つ大きな相違点は、「小林」に山名幡磨守満幸が出てこないことである。他にも山名中務太輔・入沢河内守・山名上総介・小葦平次右衛門尉など、曲中に出てこない人物は多いが、満幸の場合史実上の重さから見てかなり奇異である。満幸は氏清の娘婿であり、氏清をそそのかして明德の乱を引き興したそも／＼の張本人である。しかも、御

所勢を側面から突く、搦手の大将ということもあって、『明德記』諸本でこの人物を欠くものは見られない。その満幸の名が、なぜ「小林」では出てこないのであらうか。

ここで思い起されるのが、満幸は乱の張本人でありながら、合戦の時刻に遅れ、また戦いに利がないことを悟ると、さっさと逃げ出すという、およそ氏清とは対照的な振る舞をして、世のひんしゆくを一身に受けていることである。その時の様子を『明德記』作者は次のように非難をこめて記している。

差モ此謀叛ノ本人ニテ、歎キ諫メシ若党共ハ打死スルヲ振棄テ、人ノ物ヲ云ヲモ耳ニモ聞入給ハスシテ、今一足モ前ヘト落行給ケル有様ハ、見苦シカリシ事共也。

さらに、満幸は西国を逃亡の後、応永元年の春におめく都に上って、五条高倉辺の「あやし的小屋」に居るところを誅されるという醜態をおかす。その首を見て將軍義満は次のように語る。

是程のがれもはてぬ者の、先年内野の合戦之時、奥州となく討死したらましかば、跡なき苔の下までも、心にくかるべきに、うき名のある程はながしはてゝ、所こそおほきに、又都にて討れぬる天罰の程の浅猿さよ。⁽²⁴⁾

この言葉が当時の人々の心情を代表している。このような満幸に対する悪評が京を中心として流布し、謡曲作者の耳に入ったであろうことも、想像に難くない。

以上のような、武士にあるまじき人物であっても、記録という使命をも持つ『明德記』では、記述を欠くことは許されない。それでは、謡曲ではどうであらうか。「小林」は、死をも覚悟して主人に諫言をし、一番の軍さに奮戦して壮絶な討ち死を遂げる武将を描いた謡曲である。その中に満幸の名が出て来ないのは、単なるミスではなく、作者が観客の嗜好を考慮して、意識的にこの不人気な人物をはずしたとは考えられないだろうか。そして、ここにも、作者の『明德記』を参照しながらも、内容を再構成する意図が見られるのである。

六、むすび

以上、今まで述べて来たことをまとめる。

まず前半では、「小林」の構造上や装束上における特質を考察し、世阿弥の完成させた軍体の能に比してかなり特異な曲であり、軍体の能というよりは護法型の鬼能に近いことを指摘した。さらに、伊藤説・天野説を踏まえて、「小林」が、軍体の能に先行した修羅の能にあたるであろう可能性について論じた。

次に後半では、謡曲の山場である6段・7段は、『明德記』上巻の後半部分——男山での氏清の軍評定から山名勢の手分けにかけて——から抜き出した叙事的な「語り」「掛け合」の部分と、それを繋げる「下ヶ哥」「上ノ詠」「上ヶ哥」の節をともなった叙情的な部分から組み立てられていること。さらに、その叙情的部分は、『明德記』下巻の和歌を軸として、歌語と縁語を用いて、効果を考えた上で作詞構成されていることを述べて来た。それに附随して、語りの諫言の場での法印問答は、説話単位の差し換えが行なわれたか、または挿入された可能性があることを、また、「掛け合」の手分けの勢から山名満幸の名がはずれているのは、単なるミスではなく、意図的なものであるようになどを、能を作る側の意識で考察した。

番外謡曲は、一部のものを除いて顧られることが少ない。しかし、まだまだ問題をはらんでいる曲は多いと思われる。それらの発掘、並びに考察は後日の課題としたい。

注

(1) 『明德記』からの引用は、特にことわらない限り、和田英道氏の翻刻された宮内庁書陵部本（宮内庁書陵部蔵『明德記』

翻刻「跡見学園女子大学紀要」第12号 昭54・3）によった。

(2) 『日本庶民文化資料集成』第2巻「田楽・猿楽」(昭49 三一書房)

(3) 「謡曲作者宮増をめぐる試論」(三弥井選書4『観阿弥の芸流』昭53)

(4) 北川忠彦「能作者「金剛」と平家物語」(同右)

(5) 「梓巫女の口寄せ」が登場する曲としては、「葵上」が著名であるが、他に「陽嘉」(『未刊謡曲集』3・24に所収)がある。能と同じ梓巫女の誦句は『鴉鷺記』にも見えるが、室町期における口寄巫女の実態は、『建内記』嘉吉元年(一四四一)七月二十六日の条などから窺える。

(6) 「前期のローマンチズムと五山文学」(『新撰国文学通史』中巻 大15 三星社)

(7) 「明德記以後の軍記物語」(『中世国文学研究』昭18 磯部甲陽堂)

(8) 岩波文庫『明德記』(昭16 岩波書店)その他。

(9) 「語り物の成立」(『語り物文芸の発生』昭50 角川書店)

(10) 「能楽研究会」の「番外謡曲を読む会」の成果による。校合に用いた諸本は、次の19本である。

〈上掛写本〉①松井家蔵一番綴本、②観世宗家蔵紺表紙九行本、③般若窟文庫蔵茶色表紙上掛り節付古本、④松井家蔵妙庵玄又手沢五番綴本、⑤京大蔵江戸初期筆十番綴本、⑥能楽研究所蔵観世流五百番謡本、⑦国学院大学蔵上掛り番外謡十九冊本、⑧国学院大学蔵上掛り番外謡五十八冊本、⑨観世宗家蔵茶色表紙五番綴番外謡本、⑩鴻山文庫蔵盛親本番外謡、⑪鴻山文庫蔵大坂本番外謡

〈下掛写本〉⑫鴻山文庫蔵吉川家旧蔵車屋本、⑬鴻山文庫蔵了随三百番本、⑭天理図書館蔵江戸初期節付一番綴本、⑮能楽研究所蔵上杉家旧蔵下掛り番外謡本、⑯能楽研究所蔵六徳本系金春流謡本、⑰般若窟文庫蔵下掛り横本番外謡本
 〈上掛版本〉⑱貞享三年九月林和泉掾刊三百番本

〈参考〉⑲彰考館蔵「大木」と合冊本(岩波文庫『明德記』に所収のもの)

以上の諸本の校合により、大雑把であるが次のように系統整理できる。

① ④ ⑫

(福王系)

⑥ ⑦ ⑧ ⑩ ⑪

③

⑨

⑭ ⑬ ⑫ ⑪ ⑩ ⑨ ⑧ ⑦ ⑥ ⑤ ④ ③ ② ①
(下掛り系)

⑬ ⑫ ⑪ ⑩ ⑨ ⑧ ⑦ ⑥ ⑤ ④ ③ ② ①

(11) 例外として、⑬彰考館本のみが、7段と8段の間にワキとアイの間答の小段を持つ。後出本の改変と思われるが参考までに挙げる。

ワキ「いかに申候。只今の人はいかなる人にて候ぞ。男「さん候。当所にては見馴申さぬみやつこにて候。いかさま不審なる者にて候。某推量申し候に、御僧は氏清の御ゆかりの人と承り候。さればなつかしくおぼしめし、氏清の幽霊か、しからば小林の亡魂なるべし。こゝにまさしき神子の候程に、梓弓にかけさせ申さうするにて候。いかに神子のわたり候か。唯今化人の見え候間不審候。奥州の小林の間を、梓にかけて御覧候へ。

(12) 増補国語国文学研究史大成8「謡曲・狂言」(昭52 三省堂)

(13) 「土州吉良川の御田祭」(『日本庶民文化史料集成』第2巻「田楽・猿楽」 昭49 三一書房)

(14) 「世阿弥・禅竹」(『日本思想大系』24 昭49 岩波書店)

(15) 「国語国文」第16巻第5号 (昭32・5)

(16) 「日本歌学大系」第5巻(昭32 風間書房) によるが、その後善本たる彰考館本が水上甲子三氏(『中世歌論と連歌』昭52 私家版)により、紹介・翻刻されている。

(17) 「鬼能から切能へ」(『能の研究』 昭44 桜楓社)

(18) 「国文学 解釈と鑑賞」第48巻15号 特集「魂の深奥に生きる古典—仏教文学の魅力」(昭58・12 至文堂)

(19) 「明德記考—近衛家蔵明德記に就て—」(『国語国文』第11巻第2号 昭16・2) その他。

(20) 「能における語り物の摂取—直接体験者の語りをめぐる—」(『芸能史研究』66号 昭54・7)

(21) 和田英道「島原公民館蔵松平文庫本『明德記』略解並に翻刻」(『軍記と語り物』第14号 昭53・1) による。

- (22) 和田英道『『明德記』書誌目録稿』（『跡見学園女子大学国文学科報』第8号 昭55・3）、並びに右の論文。大森北義「島原文庫蔵本「明德記」について」（『鹿児島短大研究紀要』第20号 昭52・10）
- (23) (10) にあげた諸本のうち、②観世宗家蔵紺表紙九行本、③般若窟文庫茶色表紙上掛り節付古本、④観世宗家蔵茶色表紙五番綴番外謡本、⑤鴻山文庫蔵了随三百番本、⑥天理図書館蔵江戸初期節付一番綴本、⑦能楽研究所蔵六徳本系金春流謡本、⑧般若窟文庫蔵下掛り横本番外謡本、⑨貞享三年九月林和泉掾刊三百番本、以上8本がそれにあたる。
- (24) この部分の引用は、陽明文庫本（岩波文庫『明德記』 昭16）による。

本稿は、昭和58年6月21日、第五回「能楽研究会——番外謡曲を読む会」の輪講、並びに昭和58年8月28日、「伝承文学研究会昭和五十八年度大会」において「謡曲「小林」の研究」と題して口頭発表したものを改稿したものである。席上、諸氏より多くの御教示をいただいた。末尾ながら深謝いたします。